藤澤南岳のキリスト教観について

ジェレミー・ウッド

Fujisawa Nangaku's Thoughts on Christianity

Jeremy G. WOOD

The early Meiji period (1868-1912) saw a great influx into Japan of Western technology and institutions, as well as many new ideas and philosophies. After the repealing in 1873 of the Edo era edict banning the practice of Christianity, Japanese were again able to practice and promote the faith with relative freedom. This freedom increased again with the introduction of a new law in 1889, which also allowed for foreign missionaries to be able to openly carry out missionary work.

Japanese intellectuals' response to Christianity during this time ranged from conversion to outright hostility. Fujisawa Nangaku (1842-1920), head of the Hakuen Academy, a school for classical Chinese studies in Osaka, was a highly influential figure who was also active in the promotion of Confucianism. Unfortunately there is no prior research on Nangaku's view of Christianity. This paper therefore aims to fill this lacuna in Nangaku and Hakuen studies. It is the contention of this paper that Nangaku was overall hostile to Christianity, and that he attacked Christian thought as being incommensurable with the Confucian understanding of ethical human relations.

キーワード：藤澤南岳　泊園書院　藤澤東畡　排耶論　キリスト教思想

はじめに

藤澤南岳（1842-1920）は近代大阪を代表する文化人であり，泊園書院の二代院主としてその著述や教育活動を通し儒教の復興運動に努めた。明治期以降，西洋文化が日本に急激に普及するようになり，それに伴って西洋の主要なる宗教であるキリスト教も日本に広まり始めた。キリスト教の宣教師が次々と来日し，その伝道活動によって日本のキリスト教信者数は年々増え続けた。

南岳のキリスト教観を主題にした研究は今まで見当たらないため，南岳はどのようにキリスト教について考えたのかは不明である。

そこで，本稿は南岳のキリスト教観を明らかにすることを目的とした。明治６（1873）年に，慶長17（1612）年ころから続いたキリスト教信仰を禁止した禁教令はついに廃止された。外国人による宣教活動が公式に認められたのが明治32（1889）年７月27日の「神仏道以外の宣教宣布並堂宇会堂に関する規定」

内閣省令第41号の発令以降である[1)]。その結果，カトリック教会，プロテスタント教会等の宣教師たちがついに公に伝道活動ができるようになり，その活動により，年々キリスト教の信徒数が増え続け，明治33（1900）年の37000人プロテスタントの信徒数が明治42（1909）年には75000人まで増加した[2)]。プロテスタント教会の初期普及においては知識人階層に広く支持を得た。その一つの理由は，キリスト教は西洋の進んだ「文明の宗教」として理解されたためである[3)]。しかし，この「文明の宗教」が文明の衝突をも及ぼす結果ともなった。キリスト教を信仰し，支持した日本人の知識人，思想家もいれば，日本の風習に合わない邪宗としてキリスト教を排撃しようとした知識人も少なからずいた。例えば，哲学者で東京帝国大学教授の井上哲次郎（1854-1944）が，キリスト教は天皇を中心に据えた日本の国情に合わないものとして厳しく批判していた[4)]。その一方，キリスト教に入信し，キリスト教を熱心に普及させようとした思想家も多数いた。例えば，南岳と同じく大阪の漢学のもう一人の継承者で，懐徳堂の伝統を受け継ぐ中井木菟麻呂（1855-1943）がロシア正教会の信者となり，明治11（1878）年にその洗礼を受けた[5)]。その後，彼が懐徳堂の顕彰運動と共に新約聖書や正教の祈祷書類の翻訳にも努めた。木菟麻呂はキリスト教の信者になったからといって儒教を捨てたわけではなく，その著述に窺えるように彼が儒教のキリスト教との一致を意図していたことがわかる[6)]。

南岳は木菟麻呂と正反対で，彼の著述に散見するキリスト教に対する意見は極めて批判的で，尚且つ儒教の立場からキリスト教を邪教として排撃すべきことを主張している。

以下に，南岳のキリスト教観の特徴を考察してみる。

一，目的と方法

本稿は南岳のキリスト教観を明らかにすることを目的としたい。その方法として，まず泊園書院の初代院主で南岳の父であった藤澤東畡（1794-1864）のキリスト教観を明らかにして検討する。次に，キリスト教の歴史やその教派の相違に対する南岳の理解について考察する。その後，南岳のキリスト教における教理に対する南岳の見解とその排耶論について考察する。最後に，南岳のキリスト教に関する情報の拠所と泊園文庫に見られるキリスト教関係資料について考察を試みた。

南岳のキリスト教観を伝える最も重要な資料の一つは明治26（1893）年刊の『藤澤先生講談叢録』[7)] に所収されている南岳の諸教説である。これらの教説は元々南岳が設立した大成教会という団体の個人雑誌『弘道新説』に収録されたものであるが，本稿に各教説を引用する際『藤澤先生講談叢録』の頁数の

1）柿本一雄「政教分離の原則と宗教教育（一）」『上田女子短期大学紀要』34号（2011年）67頁を参照。
2）五野井隆史『日本キリスト教史』（吉川弘文館，1990年）288頁。
3）同上，270頁。
4）斎藤正彦『キリスト教の歴史』新版（新教出版社，1981年）116頁。
5）湯浅邦弘『増補改訂版　懐徳堂事典』（大阪大学出版会，2016年），s.v.「中井木菟麻呂」230頁を参照。
6）佐野大介「中井木菟麻呂における儒教とキリスト教との関係」『懐徳堂研究』３号（2012年）を参照。
7）藤澤南岳著『藤澤先生講談叢録』（岡島眞七，1893年）。

みを注で明記することにした[8]。引用する際，漢文にのみ句読点を付し，それ以外改行を適宜に施したが，句読点・仮名遣い等を出来る限り原文のままとした。下線はすべて筆者によるものである。

二，藤澤東畯のキリスト教観

南岳の父，藤澤東畯のキリスト教観は当然南岳の考えに影響を及ぼしていると考えられる。それゆえ，まず東畯のキリスト教観について検討してみたい。

東畯がキリスト教に言及している著述は現時点では一つのみ確認し得た。それは東畯の晩年に著した京都市伏見区肥後町，西養寺の僧阿満得聞（あまとくぶん）（1826-1906年）のキリスト教を邪説として排撃すべきことを唱えた，いわゆる排耶論の著作『斥耶蘇』〔元治元（1864）年刊〕に附された東畯の跋である[9]。得聞は唯識，因明，悉曇学に精通していたようで，様々な著作を残している[10]。『斥耶蘇』は『耶蘇教要旨』と『真理易知』というキリスト教の教義を説明する教理書における所説を論駁しようとしたものである。得聞と東畯との交流の詳細については不明なところが多いが，得聞の著作集である『遺稿』第２輯〔昭和５（1930）年刊〕に附記されている「得聞事歴」によると，得聞が嘉永元（1848）年から嘉永６（1853）年の間に東畯の下で詩文等を勉強したとされている[11]。

東畯のこの『斥耶蘇』の跋は短いものであるが，そのキリスト教に対する立場は鮮明に伝えられている。短文であるためここにその全文を引用することにした[12]。

跋

耶蘇者、夷教也。其教易入流俗、易入之極。使人不惜生、不惜生之極。使人好作亂。是於古聖人之道、其害大矣。豈可不惡乎。且與佛法相戻。故脩佛法者、亦惡之。伏水得聞上人稱深于佛學。文久癸亥歳、著斥耶蘇一冊。辨駁痛快。明如觀火、細味之、其惡之也。與我輩惡不異矣。近來夷奴伺本邦。識者病諸。戎狄是膺、荊舒是懲。上人亦師周公者。豈獨為佛法哉。是歳暮三月下浣。

東讚藤澤甫識於浪華瓦坊寓舍

（耶蘇なる者は，夷教なり。其の教は流俗に入り易く，入り易きの極みなり。人をして生を惜しまざらしめ，生を惜しまざるの極みなり。人をして乱を作（な）すを好ましむ。是れ古聖人の道に於いて，其の害大なり。豈に悪まざるべんや。且つ仏法と相戻る。故に仏法を修むる者も亦これを悪む。伏水

8）『藤澤先生講談叢録』と『弘道新説』所収の南岳の教説に関しては，横山俊一郎「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」，吾妻重二編『文化交渉学のパースペクティブ　ICIS国際シンポジウム論文集』関西大学東西学術研究所研究叢刊52（関西大学東西学術研究所，2016年）330-331頁を参照。

9）この跋は，藤澤南岳編『東畯先生文集　木』（泊園書院，1884年）22丁オにも採録されている。

10）得聞の著作集として，阿満得壽編『遺稿』第１輯・第２輯（得聞和上追慕會，1930年）がある。得聞に関する先行研究は極めてすくなく，小島通正「近世日本梵語学史の研究――阿満得聞――」『印度學佛教學研究』第28巻第１号，（1979年）しか確認できない。

11）阿満得壽編『遺稿　第２輯』（得聞和上追慕會，1930年）127-128頁

12）ここは，阿満得聞『斥耶蘇』（荷法館藏版，1864年）の跋に拠った。『東畯先生文集』に採録されている同跋は文末の２行「是歳暮三月下浣　東讚藤澤甫識於浪華瓦坊寓舍」を欠く。

の得聞上人，仏学に深しと称せらる。文久癸亥の歳，斥耶蘇一冊を著す。辨駁痛快にして，明らかなること火を観るが如し。其の之を悪むを細味するに，我輩と悪むこと異ならず。近来，夷奴本邦を伺い，識者諸を病む。戎狄之れ膺ち，荊舒之れ懲らす。上人も亦周公を師とする者なれば，豈に独り仏法の為のみならんや。）

これでわかるように，東畯はキリスト教に対して極めて批判的な態度をもっていた。キリスト教は聖人の道に大きな害を及ぼし，その信仰は人に乱を起こさせ，命を惜しまなくさせ，仏教より悖る野蛮な外国の教であると東畯は厳しくキリスト教を難じ，さらに『詩経』の語「戎狄是膺荊舒是懲」[13]（戎狄これ膺ち，荊舒これ懲らす）を借りて外国人の討伐を唱えている。

この跋では，東畯はキリスト教をただ批判しているだけで，キリスト教の特定の教義等を批判しているわけではない。もちろん，これは短い跋文であるゆえ，詳しくその見解を述べるのに限度がある。東畯のキリスト教に関する理解がどれほど深かったかは，この跋文のみでは不明である。

南岳は東畯の反キリスト教的立場を継承しているが[14]，東畯の跋文と違い，南岳はキリスト教の教理的内容やその歴史についてもある程度通じていたことがその著述に窺える。

次に，南岳がキリスト教史やその教派の相違をどのように認識していたかについて見てみたい。

三，南岳のキリスト教史と教派についての見解

南岳の教説「尊王ノ大義」の中で南岳はイスラム教や仏教と共にキリスト教の歴史と教派について述べている。

…耶蘇ナル者出テ其教ヲ主張ス耶蘇ハ吾垂仁天皇二十九年ニ生ル六十一年ニ羅馮王ニ磔殺セラル此教ヲ奉スル者蔓延シテ遂ニ洋教ト呼フ…又希臘教ト呼ヒ脩教ト呼フ皆洋教ノ別派ナルカ脩教ハ日耳曼ノ薩克宗尼亞ニ生レタル路得ノ唱フル所ニシテ又西教トモ呼ヒ皆互ニ殘殺ヤマズ[15]

イエス・キリストは紀元前１年，日本でいうと垂仁天皇29年に生まれ，32年後にローマ王（羅馬王）によって十字架にはりつけにされ，その後キリストの信者によってキリスト教は西洋に普及し，後にキリスト教は違う教派に分裂して互いに戦ったと南岳は理解していることがわかる。南岳はキリストが「ローマ王」によってはりつけにされたと述べているが，正確にはローマ帝国の第５代ユダヤ属州総督のポンテオ・ピラトであった[16]。ここで特に興味深いのは，南岳がギリシア正教（希臘教）やルター（路得）派のプロテスタント教会等，キリスト教における教派の存在について認識していたことが窺える。その

13）『詩経』頌，魯頌，閟宮。

14）東畯の没後も得聞は泊園書院との親交が続いていたようである。得聞の『生起集説』（永田文昌堂，1880年）と『異教対話　一名因明術』（万谷久右衛門，1897年）の二書には南岳の序が附されている。

15）藤澤，『藤澤先生講談叢録』，38頁。

16）マタイによる福音書27:11-26。

教派の間における教義の違いについても認識はあったようである。「未曾有ノ世ニ遇ヲ喜フ」の中に南岳は次のように述べている。

> 或ハ云フ人ノ精神ハ至重ニシテ長ク天地ノ間ニ存ス故ニ其人死スルモ七日ゴトニ祭ヲ設ケ又一年二年ト逐次ニ祭ル可シ必感通シテ來リ享ト是ハ佛家ノ説ト同様ナルカ即チ羅馬ノカソリカ教會ニ原ツクト云ヘリ或ハ云フ人ハ死すレハ靈魂ハ消滅シテ存セス之ヲ祭ルハ無益ナリト是ハ米國耶蘇師アツキンソン等カ主張スル所ナリ[17]

多少わかりづらいが，ここでは南岳はカトリック教会とプロテスタント教会の間における教義の違いについて論じていると考える。前半の「精神ハ至重ニシテ長ク天地ノ間ニ存ス…即チ羅馬ノカソリカ教會ニ原ツク」は恐らくカトリック教会における「煉獄」の思想とその典礼（煉獄にいる死者のための祈りやミサ）のことを指して述べていると考えられる。また，後半の「…死すレハ靈魂ハ消滅シテ存セス之ヲ祭ルハ無益ナリト是ハ米國耶蘇師アツキンソン等カ主張スル所ナリ」はプロテスタント教会の煉獄に対する批判について述べられていると考える。南岳は「米國耶蘇師アツキンソン」についてこれ以上に述べていないため，アツキンソンという人物は具体的に誰なのかは不明であるが，候補者としては1873年に来日したジョン・レイドロー・アトキンソン（John Laidlaw Atkinson 1842-1908年）というアメリカン・ボード（会衆派の外国伝道局）の宣教師が挙げられる。1873年に来日し，アトキンソンが関西を中心に布教活動を行い，神戸で兵庫教会を設立し，また京都では同志社英学校にも務め，仏教や日本文化を題材にした『旭光』という雑誌も編集，刊行した[18]。『旭光』は未見であるが，アトキンソンが本当に南岳のアツキンソンと同一人物であったならば，南岳はこの雑誌を通しアトキンソンの教説に触れた可能性があると考える。

以上により，南岳はキリスト教史とその教派における教義の違いについてある程度知識はあったことがわかる。次に南岳の排耶論について考察してみたい。

四，南岳の排耶論

南岳の排耶論は大きく２点に要約することができる。一つ目は，キリスト教は儒教で説く「人倫」と「礼」の考えに反するものとして排すべきものであると主張している。二つ目は，キリスト教等の宗教の説く超自然的現象は現代の文明社会においては信ずるべきでないとの主張である。以下に，南岳の言葉を挙げながらこの２点について考察する。

17）藤澤，83頁。

18）日本基督教団『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局，1986年），s.v.「アトキンスンン・（アトキンソン），ジョン・レイドロー」を参照。アトキンソンの仏教観については，竹中正夫「排耶論にこたえた宣教師たち――M・L・ゴードンとJ・L・アッキンソンの場合――」，同志社大学人文科学研究所編『排耶論の研究』（教文館，1989年）174-192頁を参照。

1.「人倫」と「礼」の観点からキリスト教を批判する

「尊王ノ大義」では南岳はキリスト教の教理は人倫に背くものとして厳しく批判し，次のように述べている。

> 況や耶蘇ノ教タル初歩ノ處ニテ酒ヲ禁シ品行ヲ正シクスル等ハ天ヲ敬スルヲ本トシテ衆人ヲ誘導スル其宜ヲ得タリトス其上級ニ進ミ竟ニ天道背カス教旨ニ由レハ生父母ノ命ハ聞ニタラス國王ノ命モ從フヘカラスト云ニ至リテハ人道ノ大害ナリ此處ハ耶蘇ノ徒ノ首脳ナル故ニ彼教徒ハ此レニ種々ノ方便ヲツクレドモ要スルニ父ヲナヘカシロニシ君ヲナミスルト云ニ歸スルナリ豈ニ似テ非ナル者ナラスヤ吾邦人ニシテハ君父ノ重キハ稍々ワキマヘタルナレハ汝ハ父ヲナミシ君ヲナミスト云ヘバ必怫然タラン誠ニ人ハ道ノ重キヲ心得テ彼教ニ從ヘバ第一皇室ニ對シテ無禮ナリト感格ヲ起スヘシ今ヤ人智ノ鋭敏ナル時ニ當リ實効上ヨリ進歩シテ人倫ノ大ヲ失ナハサルヲ旨トスヘシ[19]

南岳は最初に「酒ヲ禁シ品行ヲ正シクスル」ものとして「天ヲ敬スルヲ本トシテ衆人ヲ誘導スル其宜ヲ得タリ」と一旦キリスト教を称賛しているが，結局のところ「生父母ノ命ハ聞ニタラス國王ノ命モ從フヘカラスト云ニ至リテハ人道ノ大害ナリ」と厳しくその教えを批判している。キリスト教の教えに従えば，父母を敬せずして，最終的には皇室に対しても無礼となることに至ると南岳は恐れている。このようにキリスト教は「人倫」をないがしろにした思想と理解した儒者としての南岳にとっては，とても許し難いものであったろう。

南岳は「生父母ノ命ハ聞ニタラス國王ノ命モ從フヘカラスト云ニ至リテ」について詳しく述べていないため，具体的にキリスト教のどのような教えが批判されているかはわからないが，恐らくはイエスの次のような言葉に対する批判であると考えられよう。

> わたし〔イエス・キリスト〕が来たのは地上に平和をもたらすためだ，と思ってはならない。平和ではなく，剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に，娘を母に，嫁をしゅうとめに。こうして，自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は，わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も，わたしにふさわしくない。また，自分の十字架を担ってわたしに従わない者は，わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとする者は，それを失い，わたしのために命を失う者は，かえってそれを得るのである。[20]

聖書の中に父母や君主に従事する重要性についても説かれているが[21]，南岳はこれについては触れていない。また，南岳は「酒ヲ禁シ品行ヲ正シクスル」と述べているが，キリスト教本来の思想には禁酒の考えがない。しかし，日本基督教婦人矯風会〔明治19（1886）年創立〕等の団体の一つの運動としては

19）藤澤，38頁。

20）マタイによる福音書10：34-39 『新共同訳』。

21）出エジプト記20：12，マタイによる福音書22：15-22を参照。

禁酒を目指していたため[22]，「酒ヲ禁シ品行ヲ正シクスル」はこのような団体の活動を意味しているか。

南岳もまた，父母や君主に対するだけでなく，キリシタンはキリスト自身に対しても不敬であると主張している。南岳は「禮論」に次のように述べている。

> 彼耶蘇ナル者ハ其法ヲ國中ニ行ハントシテ志ノ烈ナルニヨリ刑ニ觸テ死セリ其身ヲ顧リミスシテ志ヲ立て後世ノ法ヲ存スル實ニ美ナリトスルモ其徒ノ其靈ヲ祭リ是ヲ尊敬セントシテ其像ヲ作ルニ磔死ノ像ヲ制スルハ大ニ非ナリ吾ハ彼教徒ト稱スル者ノ爲ニ之ヲ惜ム何ソ其平生ノ威儀アル形ヲ取テ像トセサルヤ彼ノ土ノ人或ハ云ハン此ハ耶蘇一生ノ精神ノ注スル所ニシテ心力ノ極度ナリ故ニ此像ヲ作ル衆人ノ此ヲ見ル者感激スル所アル尋常ニ非スト嗚呼其説未タ美ナラサルナリ吾邦楠公モ死シテ精忠ヲ盡シ國家ニ報セリ然レトモ其像ヲ奉祀スルニハ平常ノ衣冠若クハ甲冑ニテ榻ニ踞スルヲ模像トス其屠腹セルハ實ニ精神ノ注スル所ナルモ其肉体ヲ露ハシ血痕ヲ帶スルヲ傳フルハ見苦シキナリ且其人ニシテ不敬ナリ況ンヤ耶蘇ノ死スル天ニ訴ヘ嘆息スルノ語アリ未タ甘心喜樂スルトハ信セス吾楠公ノ笑ヲ含テ地ニ入ルトハ大ニ雲泥ナリ然ルニ其像ヲ制スルニ此醜状ヲ露ハシタルハ唯情ヲ取テ禮ヲ知ラサルノ失ナリ故ニ吾深ク彼徒ノ爲ニ之ヲ惜シム吁情ニ從フ果シテ是ナルカ[23]

ここもまた，南岳は一旦「其身ヲ顧リミスシテ志ヲ立て後世ノ法ヲ存スル實ニ美ナリ」とキリスト自身を称賛しているが，キリスト教徒の行為をその批判の的としている。要するに，キリシタンがキリストの十字架にはりつけにされた無残な姿を像にし，見る人を感激させることを狙っていることはよくないと南岳は述べている。日本には，後醍醐天皇を奉じ鎌倉幕府打倒に貢献した楠木正成〔楠公（1294?-1336)〕がその死を迎えた際，戦で彼が何度も切られ，最終的に自害したのにもかかわらず，後世彼が奉じられる際，その像は平常の姿を表している。彼の死の際の血塗れの姿や肌を露出した姿をキリスト像のように表現すると，却って「其人ニシテ不敬ナリ」と南岳はいう。南岳によるとキリスト教徒のこの「不敬」は「唯情ヲ取テ禮ヲ知ラサルノ失ナリ」に起因するとされている。

像の表現だけでなく，キリスト教における神（天帝・上帝・天主）を直接礼拝すること自体も不敬・無礼であると南岳は主張している。

明末の中国に渡ったイエズス会宣教師マテオ・リッチ（1552-1610）の著書『天主実義』〔万暦32（1604）年刊〕にキリスト教における天主（天王）を儒教の経典に見られる上帝・天帝と同一視する論法が示されている[24]。南岳はこのような教説を知っているようであり，厳しく批判している。上帝を祭ること自体は良いことであり，聖人の道にかなっているとされるが，儒教では天帝を祭るべき主体は天子のみであると南岳は主張している。南岳は「祭祀ノ大概」において次のように述べている。

> 嘗テ耶蘇ノ理證ナル書ヲ讀ムニ天王ハ則四書五経ニ稱スル所ノ上帝ナリト云ヘリ是吾聖道ト符合セ

22）斎藤，119-120頁。

23）藤澤，16-17頁。

24）「西士曰…吾國天主，華言上帝，與道家所塑玄帝玉皇之像不同。」『天主実義』第２篇。

リ然ルニ之ヲ非トスルハ何ゾヤ答曰天ヲ敬シ上帝ヲ祀ル實ニ吾道ノ大典ナリ耶蘇ヲ講スル者此一事ノ是ヲ主張シテ人心ニ媚フルノミ…聖人…唯其制ヲ立テ上帝ヲ祭ルヘキハ天子ノミ山川ノ神ニ事ルハ唯其諸侯ノミ平民ハソノ祖先ニ祭リ祖先ノ靈之カ善悪ヲ見テ視福[25] 降ス所則上帝ノ命ナリ祖先カ上帝ノ命ヲ傳ルナリト云意ナリ猶一々ニ之ヲ人民ニ明諭セス唯人事ヲ盡スガ天ヲ敬スルナリト教タルハ制作ノ首腦ニシテ天下ノ妙用ト云フ可シ況吾邦ニ在テハ天皇ノ命ニ從フ即チ上帝ノ命ニ從ナリ[26]

南岳は天帝を祭るべきなのは天皇，山川の神を祭るべきなのは諸侯，そして人民はその祖先を祭るべきとしている。なお，祖先は上帝の意思を人民に伝えるという。日本では天皇がおり，天皇の命に従うことはつまり上帝の命に従うことと同様である。人民は敢えて上帝を直接祭る必要はなく，天皇の命に従事することは天を敬することと同様であるというのが南岳の見解である。南岳の『中庸講義』においても上と同様な論が主張されている。彼は次のように述べている。

…唐ノ制度ハ此通リデ，周以来ハ爾ウ成ツテ居リマス，我ガ國モ同ヂ，紫宸殿ノオ庭デ一月一日ニ天地四方ヲ拝セラレルノハ，主上ガ遊バスノミデ，銘々モシテヨイガ，却って不敬デ，身分ヲ忘レテ，天皇ト同ヂ様ナル働キ仕事ヲ致シマスヤウナコトニナル，故ニ銘々ハ天地ノ祭リハセイデモヨイ，天皇ヲ敬シ，天照大神ニ敬禮スレバヨイトナッテ居ル，唐ノ制度ヨリモ，我ガ國ノ制度ガハッキリシテ居ル，私ノ書イタ講堂新説ニ，天皇陛下ノ命ニ從フガ，天帝ノ命ニ從フノデアル，天照大神，天皇陛下ヲ敬スルノガ，天帝ヲ敬スルノデアル故ニ天照大神，天皇陛下ニ敬禮スル心アレバ，天帝ヲ別ニ祭ルニハ及バン，夫レデハ足ランカラト，天帝マデモ祭ルノハ，我ガ國デハ入ラントコトコトト書イテ置キマシタ，[27]

これは『中庸』本文の「郊社之禮，所以事上帝也。宗廟之禮，所以祀乎其先也。明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎」[28] に対する南岳の解説の一部である。上帝や天地の鬼神を祭るのは天皇の役割であるため，天皇以外が天皇と同様に上帝・天地の鬼神を祭れば，却ってその分を超えることとなり，天皇に対する不敬・無礼となると南岳は述べている。

以上により，儒者である南岳の「人倫」と「礼」の観点から見たキリスト教に対する批判的見解の様相が明らかになった。キリスト教の教えはその信者に父母や天皇に対して不孝や不忠をせしめることに至る。キリスト教徒が作るキリストの像はキリストの死の時の無残の姿を表現しているゆえ，キリスト自身に対しては不敬であり，礼に適っていない。さらに，キリシタンの中ではキリスト教の神と儒教に

25）同教説を収録している『弘道新説』は「禍福」にしている。藤澤南岳『弘道新説』〔明治21（1888）年７月〕４丁ウを参照。

26）藤澤，122-123頁。

27）藤澤南岳述『中庸講義』（文海堂，1905年）56丁オ -56丁ウ。

28）朱熹（1130-1200）の『中庸章句』第19章第６節に当たる。泊園書院の『中庸』分章法では第17章に当たる。泊園書院における『中庸』学については拙稿，ウッド・ジェレミー「泊園書院の『中庸』学について」『文化交渉』（東アジア文化研究科院生論集）６（2016年）を参照されたい。

おける天帝を同一視する考えもあるが，天帝を直接祭るのが天皇の役割で，平民が天帝を祭ると却って不敬で無礼となる。

次に，南岳の排耶論に見られる二つ目の特徴である奇跡的・超自然的現象の信仰に対する批判について考察してみたい。

2．南岳の奇跡的・超自然的現象に対する批判

南岳はキリスト教の教理や行為を難じているだけでなく，聖書等に見られる奇跡的・超自然的現象をも批判の的としている。南岳は「祭祀ノ大概」には次のように述べている。

> 新舊約書ヲ讀ニ妄誣ノ言半ニ過ク大凡婆羅門ハ天神ノ口ヨリ生スレタル種族ト云ヒ哈馬駄[29]カ洞中ニ於テ天神ヨリ授カル所ノ聖書ト云ヲ可蘭ナル書ヲ経典トシ摩西カ十誡ヲ神ヨリ口授セリト云ヒ基督カ磔死ノ後三日ニ蘇生シテ四十日ヲ經テ天ニ升レリト云ヒ天帝カ耶蘇トナリテ人間ニ出ルナリナド云フ如キ宗教家ノ言ハ一切人ヲ愚弄スルト云者ニシテ今日文明世界ノ人物ノ信ス可キ事ニ非ス且天褻神ヲ涜ハ無礼ナリ[30]

キリスト教のみならず，イスラム教や梵教も，各宗教において説かれている超自然的現象は人をばかにしているとし，文明の進んだ世界に生きている現代人として信じるべきことではないと南岳は厳しく批判している。さらに，目に見えない手に取れないような超自然的現象は聖人の敢えて教えなかったことと南岳は述べている。「又幽冥ノ事ノ推スヘクシテ目ニ見手ニ取ルヲ得サル事ハ聖人強テ教トセス」[31]。

南岳は宗教における奇跡の現象を批判しているだけでなく，最終的には宗教そのものを批判することに至る。宗教は常識や日常経験を超えたようなことを説くため，知識人は必ず宗教を軽蔑すべきとし，宗教を信じる者は皆「愚昧不学」と南岳は罵倒している。「空言ヲ以テ宗教ヲ唱フル皆此語ノ如ク實驗ニ疎ナリ故ニ英傑ノ士ハ必宗教ヲ輕侮ス其宗教ヲ信スル人ハ皆愚昧不學ノ徒ノミ」[32]。

以上のことから，南岳はキリスト教における超自然的現象を断固として非難し，その上に宗教そのものを厳しく批判し，知識人の避けるべきものとして主張していることが明らかになった。

南岳はキリスト教における超自然的現象を批判している態度と儒教における上帝・鬼神等の宗教的要素をそのまま受け入れる態度と齟齬があるように感じられるが，南岳はそもそも儒教を宗教として認めていない。「吾聖人ハ德ヲ修メ倫ヲ明ニシ人事ニ主トシテ以テ神明ノ保護ヲ待ノミ此レ宗教ニ異ナル所以

29）イスラム教の開祖ムハンマドの漢字名表記の誤記。当時ムハンマドの漢字名表記としては「馬哈黙德」「馬哈麦德」「馬哈黙」が一般に使用された。北村三郎『世界百傑傳　第四編』（博文館，1891年）229頁，松村介石『万國興亡史』（警醒社，1902）114頁，ロベルト・ファルケ『三大世界教』青木律彦訳「神学叢書　第６編」（真理社，1903年）９頁を参照。同教説を収録している『弘道新説』は「馬哈黙」としている。藤澤南岳『弘道新説』〔明治21（1888）年７月〕４丁オを参照。

30）藤澤，123頁。

31）同上。

32）同上，31頁。

ナリ」[33]。聖人の道は鬼神に頼りすぎず，「修徳」や「明倫」，人事を主とするところから宗教とは異なると南岳は考える。彼はまた次のように述べている。

> 彼ノ邦ハ大ニ利用厚生ノ術ハ美ナルアレドモ未タ正徳ノ眞面目ヲ得ス況ンヤ禮ヲ以テ民ヲ治メ齊フルヲヤ且彼ノ耶蘇ト云フ新舊等ノ宗教アレドモ以テ其心術ヲ正シクスルニ足ラス…今吾邦利用厚生ハ未タ美ヲ盡サヽルカモ知ラス正徳ニ至テハ大ニ外邦ニ勝レリ[34]

これにより，キリスト教という宗教を称える西洋は，科学技術的な面では日本より進歩しているといえるが，日本では人倫や道徳が重視されている面からみれば，日本のほうが勝っていると南岳は考えていることがわかる。

以上，南岳の排耶論を中心に論じてきた。上述したように，南岳はキリスト教の歴史や教理に関する知識はある程度あったことがわかる。しかし，南岳はそのキリスト教情報の拠所についてはほとんど述べていないため，どのような書を読んでその知識を得たかについては不明である。

次に，泊園文庫に所蔵されているキリスト教関係資料を調査し，可能性として南岳がどのようなキリスト教書を読んだかについて考察してみたい。

五，泊園文庫所蔵キリスト教関係資料

南岳はどのようなキリスト教書を読んだのか。「祭祀ノ大概」において南岳は「嘗テ耶蘇ノ理證ナル書ヲ讀ムニ天王ハ則四書五経ニ稱スル所ノ上帝ナリト云ヘリ是吾聖道ト符合セリ」[35] と述べている。上述したように，キリスト教の神を儒教の経典に見られる上帝・天帝と同一視するような主張は『天主実義』にみられるが，『天主実義』も，南岳のいうような「耶蘇ノ理證ナル書」（キリスト教の教理書）のような書は泊園文庫に入っていない。『関西大学泊園文庫蔵書書目』に基づき，泊園文庫に所蔵されているキリスト教関係資料は以下の12点があることがわかる[36]。なお，LHで始める記号は関西大学図書館泊園文庫の資料の請求記号である。

排耶書

1．『辯妄』一冊〔漢文〕安井，息軒（衡）LH2*3.02**59
2．『斥耶蘇』一冊〔和文〕僧得聞　LH2*3.02**311
3．『海防臆測』一冊〔漢文，写本〕古賀，侗庵（煜）LH2*3.02**107

33）同上，122頁。
34）同上，31-32頁。
35）同上，122頁。
36）壷井義正編『関西大学泊園文庫蔵書書目』（関西大学出版部，1958年）172-173頁を参照。

4．『釋教正謬初破』二巻二冊，『釋教正謬再破』一冊〔漢文〕杞憂道人 LH2*3.02**310-1, LH2*3.02**310-2, LH2*3.02**310-3

聖書の注釈書と宣教師の論著

5．『釋教正謬』一冊〔漢文〕Edkins, Joseph LH2*3.02**296
6．『希伯來書註釋』一冊〔漢文〕Dodd, Samuel　LH2*3.02**312
7．『馬可傳福音書畧解』一冊〔漢文〕LH2*3.02**313
8．『使徒雅各書註釋』一巻，『彼得前後書註釋』一巻，一冊〔漢文〕Dodd, Samuel　LH2*3.02**314
9．『約翰一二三書注釋』一巻，『猶太書注釋』一巻，一冊〔漢文〕Green, David　LH2*3.02**315
10．『使徒行傳註解』一冊　〔漢文〕Nevius, John, Livingstone　LH2*3.02**316
11．『馬太福音註釋』一冊　〔漢文〕Legge, James　LH2*3.02**317
12．『約翰聖經釋解』一冊〔漢文〕Hobson, Benjamin-Moule, Arthur, Evans　LH2*3.02**318

1～4はすべて排耶書であり，6～12はすべて中国で刊行されたと考えられる聖書の注釈書である。5はイギリスの宣教師・中国学者であるジョゼフ・エドキンズのキリスト教の立場から仏教を批判した書である。3の『海防臆測』以外，各書において南岳の書入れが見られず，南岳が実際にこれらを参考にしたことがあるか否かはわからない。『海防臆測』には南岳の書入れと見られる数か条が存するが，これらは『海防臆測』のキリスト教について論及されている箇所とはほぼ関係ない。

結局のところ南岳の参考にしたキリスト教関係資料はわからないが，南岳の著述に見られるように，彼が聖書の内容に関する知識があったことは明らかである。また，1の『辯妄』〔明治6（1875）年刊〕は江戸・明治の著名な儒者であった安井息軒（1799-1876）の排耶書であり，聖書批判や忠孝論など，儒教の学説を中心にキリスト教を批判しているところが，南岳の排耶論と共通しているように考えられる。しかし南岳が実際に『辯妄』から直接影響を受けたがどうかについてはさらに研究を要する。

おわりに

本稿では，まず藤澤東畯のキリスト教観を考察し，キリスト教に対して彼が極めて批判的であったことを確認した。次に，南岳のキリスト教史や教派理解について検討し，誤解は多少見られるにしても，ある程度その知識はあったことがわかった。次に，南岳の排耶論を考察し，その特徴として彼は儒教思想における「人倫」と「礼」の観点からキリスト教を批判したり，さらにキリスト教における奇跡や超自然的現象の信仰を厳しく批判したりしていることを明らかにした。最後に，泊園文庫のキリスト教関係資料を調査し，全部で12点の資料を確認できたが，南岳が実際にこれらを参考にしたかは不明である。

以上により，藤澤南岳のキリスト教観は非常に否定的であることを明らかにした。南岳にとってキリスト教たる宗教は聖人の道を阻害し，礼を知らない外国人の思想であるため排すべきものに当たるものであった。

当時においては南岳のような排耶論はどれほど特徴的であったろうか。従来，近代日本の仏教徒による排耶論は比較的多く研究されてきているが，安井息軒の『辯妄』以外明治・大正の漢学者による排耶論に関する研究がほとんど見られない。

南岳の排耶論の特徴をさらに明らかにするために，『辯妄』など，当時の他の儒者の排耶論と比較し調査する必要がある。また，南岳がどのようなキリスト教書を参考にし，どのようにキリスト教に関する知識を得たかについてもさらに研究を要する。このことについては今後の課題としたい。